

# 前川ゼミナール

第35回 リスクを想定して取り組む

前川 貢(前川FP事務所アドバンス代表)  
17年間の大和証券勤務のうち、10年を債券のエキスパートとして活躍。独立後は個人の資産形成をサポートする活動を続けている。生活設計塾クルーの提携先。

日経平均株価は、年が替わっても上昇の勢いが衰えず、17,000円をうかがう動きになっている。夏ごろまでに高値をつけ、年後半にかけて調整に入ると見る専門家が多く、高値は18,000円とも、22,000円とも言われている。昨年末から「日本株はバブルに入る」と言っている私のところに、「現在が過熱状態にあることはわかっているが、何かに投資してみたい」という話が今年に入って何度も入ってきた。

株式投資を実際に始める前に、過去における株式バブルに入ってから一般的な投資行動のパターンをながめ、注意すべき点を考えてみたい。

バブルの前提は、株価が既に妥当水準以上に達していることである。したがって、株価の行方は企業の内容よりも買い材料が目立って、どこまでの値上がりが見込めるのかという目安にしやすい株価のチャート予想が流行る。

投資家は早めに利益を確定しようとする結果、短期売買になりやすく、値上がり期待が薄れると、先ほどまで買われていた銘柄が急落し、新たな銘柄が持てはやされるなど、投資スタンスが短期志向になる。

相場の最終局面に近づくと、大きく利喰える機会が少なくなる。評価益が少なくなってくると、損を取り返すため、一回あたりの投入金額を増やすことで多くの利益を確保しようとするなど、投機色が強まる傾向がある。当初は下がり始めると長期投資で臨めばいつか報われると株価が下がった水準での追加購入、いわゆるナンピン買いを入れるが、その後も下げ続けると、株価の値動きに気持ちが翻弄されて耐え切れず、株式投資を放棄する。結果何年も塩漬けにして死に体の資産を作ってしまう。思い当たる経験者は多いのではないだろうか。

「株価が高くなってしまって、どれに投資したらいいかわからない。余

り欲張らないから、安心して持てる銘柄はないか」。こういう場合は、株価チャートを見て、業績・財務内容を確認して、株価が妥当なものを選ぶが、私の経験では「安心できる確度の高い銘柄」ほど、バブルがはじけた後、後悔している。何故か。大抵の銘柄の株価が妥当株価以上にあるのに、余り値上がりしないで放って置かれているものは、妥当株価以上に買われる材料がなく、市場の関心が薄い銘柄である可能性が高い。バブルはそんな銘柄まで拘うほど長続きはしない。

バブルがはじけると、どんな優良銘柄でも値を下げ。「半値8掛け2割引で底を打つ(=0.5×0.8×(1-0.2)=0.32)」という株式格言は、株価の下げの目安として、高値から3分の1程度まで下落する可能性を示したものだ。株価のあるべき水準を見失うほど下げ方がきつくなると最終的には、企業の解散価値である一株純資産が下げの目安になることが多い。あのトヨタ自動車さえ、2000年につけた5800円の株価から6割も下げ続けた。いわんや、買い材料が乏しく、バブルで連れ高したような銘柄は、「そんな株価もあったよね」という話の種になるような大きな下

げに見舞われることが有り得る。

したがって現下の水準以上で株式投資をする場合は、今はバブルという認識を持ち、①「この機会を逃したくない。投入した資金がなくなっても構わない」という投機であることを意識して入る、②株式投資を楽しみたい。ただし、株価が下げ続ける場面になったら株式投資は中断して仕舞う、といったスタンスを明確に持つことが大事だ。②が目的であれば相場の変化がわかりやすいものを選択したい。個別銘柄であればトヨタやキャノンなど企業内容がわかりやすい東証1部銘柄、投資信託であればETFや特定の株価指数に連動するもの、特に株式投資をしている人の追加購入であれば、自分では選別が難しくなった中小型株を対象にしたものを同時に持つのもいいだろう。

どうしても動くものに目が行きがちだが、投資対象は日本株だけではない。欧米株式、BRICs株式、外債など、それぞれのリスクを想定し、リターンとのバランスを考えて、自分に合ったものは他にないかと、選択肢は広く持ちたい。くれぐれもリスク想定なしで、飛び込まないように注意しましょう。

